

## 幻の「鉱業科」から産まれて来た 「資源工学科」の生ひ立ち

森 田 豊 夫

明治15年早大の前身、東京専門学校創立には「政経」「法」「英」および「理」の4学科が設置された。その中の「理学科」は入学者僅か3名と少く、3年目で廃止のうき目にあった。初代校長大隈英磨は米国で天文学を学び、「星学」および「英語」を担当し理学から工学への学科目として「物理化学」「動物植物」「代数幾何」「地質鉱物」および「測量術」などの講義を設け、「鉱業」への、即ち「工業」への学問的アプローチを行った。これにより大隈侯の年来の希望がかなえれた訳だが、創立間もなく「理学科」が廃止になったことを、「千歳の遺憾である」と明治30年の15周年記念式典に残念がって述べている。明治39年時の学長高田早苗は竹内明太郎氏の絶大な援助により明治41年、「理工科」を設けその中に「鉱業科」を「機械科」「電気科」と共に設置した。最初の名のりを挙げた時の鉱業科は、明治43年「採鉱学科」の名のもとに授業を開始した。理工科創設に大いに力になった竹内鉱業株式会社長竹内明太郎氏は高知の人、元首相吉田茂の実兄で芳谷炭鉱（佐賀）、遊泉寺銅山（石川）、鉄工所（唐津）、製作所（小松）、および自動車製造（ダット）等を経営し大学の校賓でもあった。

理工科創立の明治41、2年頃、大隈侯は邸内で蒸溜亜鉛製錬の実施試験に立ち会ったが、試験は成功しなかった。その時の実験者は我が国初めての「レトルト」による亜鉛製錬の特許を得た。明治45年白瀬中尉が南極探險の時のスポンサーだった大隈侯は、中尉が南極から採取した岩石（泥岩と思われる氷錐石）



森田豊夫（もりたとよお） 大正2年（1913）1月2日東京に生れる。私立巣鴨中学、第一高等学院を経て昭和15年3月理工学部採鉱冶金学科工経分科卒。華中鉱業股份（15.4—16.1）、兵役（16.1—17.7）などを経て18年10月大学院特研究生となり中国の資源調査（19.2—7華南）、（20.4—8華北）に従事。専門部工科助教授（21.3—24.3）、理工学部講師（24.4—12）、助教授（24.12—34.3）教授（34.4—58.3定年）

を受取り当科に預けられ現在も保存されている。この様な面を見ると大隈侯は仲々、山氣があり我が科の誕生に大いに力になっていることが伺える。

大正6年3月、「採鉱学科」は「採鉱冶金学科」となった。大正9年新大学令に則って理工科が理工学部になり当時の採鉱冶金学科の吉川岩喜教授（明治32年東大採冶科卒）は早大として最初の学位（工学博士）を授与された。

大正14年に採鉱冶金学科は採鉱専攻、冶金専攻に分離され、その後合併したり別れたりしてきたが、昭和14年にはっきり第1分科（採

鉱), 第2分科(冶金), および工業経営分科に分立した。同年専門部工科が開設され昭和18年には同科の中に「鉱業科」「農業科」設立の議案あり, 昭和19年4月「鉱山地質学科」の名称の下に第1回生を迎えた。専門部工科「鉱山地質学科」の新設には現大学校賓各務良幸氏の寄附(金5万円)に仰ぐ所が多かった。各務良幸氏は乙女鉱山(山梨)高見鉱山(後の尾小屋鉱山, 石川)栃木鉱山(栃木)等の鉱山を経営, 鑄物研究所創立にも大いに資金援助をされた方で, 竹内明太郎氏と同様大学の校賓であるのも何かの縁と思われる。昭和24年4月新制大学となり旧採鉱冶金学科の第1分科(採鉱)および専門部工科の鉱山地質学科を合併し第一理工学部鉱山学科として発足昭和26年には新制大学院修士課程, 昭和28年には博士課程を開設し昭和36年には鉱山学科を「資源工学科」に改名した。「改名」が教授会の議題になり, もみにもまれてやっと通過した。名称変更も楽ではない。その後は他大学も「資源工学科」とか「資源開発工学科」とかの名称に変わったが, たゞ秋田大学のみ「鉱山学部」の名残をとどめている。

当科の設立時の考え方は工業への道は鉱業よりとすることから「鉱業科」が議案に上ったと思われる。採鉱科→採鉱冶金科→鉱山科→資源工学科の変遷を経て現在に至った訳である。今後2・30年たつたらどんな名称になるかあの世での楽しみの一つです。

大正2年第1回採鉱科学生を世に送ってから丁度70年, 小生もこの世に生を享けて70年, 3月末日をもって定年退職しますが資源工学科には「定年」はありません。今後益々当科の発展を祈念し, 今までの諸先輩, 諸先生および資源工学会の皆さまの絶大な御支援に感謝致します。

## 早稲田を出てから20年

林 紀 夫

「数少ないマイニング・プロパーであるので,

資源工学会会報に, 何かを書いて欲しい」と橋本先生からのご要請である。資源の主流がマイニングであるならば, 確かに数少ないマイニング・プロパーである。早稲田を出てから十九年, 来し方を振り返って, 雑文を呈することにする。

昭和39年卒。資源工学科第3期(鉱山学科最終入学)。同期の桜31名。非金属1名, 石灰石1名, 採油1名。学科が過渡期であるにしてもマイニング・プロパーは少ない級である。

原田研究室。日本鉱業(株)入社。日立鉱山を振り出しに, 北へ北へ花輪鉱山, 豊羽鉱山で主として黒鉱の選鉱及び坑廃処理関係に専念。その後, 国際協力事業団(JICA)の派遣専門家としてトルコ共和国で技術指導。帰国後再び雪の北海道は大江鉱山。この間2回の本社勤務を経て, 現在は日本鉱業協会へ出向中。

早稲田を出てから十九年, その大半を現場で過ごして来たことになる。思えば, 浅学非才の身が, 紆余曲折を経て, 現在あるのも諸先生を始め資源工学卒の方々のご指導の賜物と, 心から感謝申し上げている。

再びマイニング・プロパーについて。鉱山学科から資源工学科に科名を変更してから約20年経過しているが, その間現実の国内鉱山はどうなっているであろうか。昭和40年4月1日と昭和56年4月1日の鉱山数及び従業員(いずれも小鉱山を含む)は, 次のとおりである。

金属鉱山数399→74, 非金属鉱山数1,127→637。金属鉱山従業員数46,643→11,422, 非金属鉱山従業員数41,922→18,483。この内所謂大手の鉱山数は, 金属60→6, 非金属128→73である。

この減少は今後も毎年確実に続くであろう。鉱山数が減少しても, 全国の資源工学科系の卒業生が減る訳ではない。鉱山には男のロマンがあると言われる。しかしロマンを求める道は, ますます険しくなるであろう。

因みに、主要金属である銅、鉛、亜鉛のLME価格（ $\text{£/t}$ ）は、銅489.14→864.61、鉛115.13→362.51、亜鉛112.97→423.86である。これをその時点の通貨換算率で円換算すると、銅472.9千円/t→388.8千円/t、鉛116.1千円/t→163.0千円/t、亜鉛113.9千円/t→190.6千円/t（国内建値とは若干異なる）となる。金属価格は外貨建てであるので、円が強くなれば、それだけ国内価格は低下するが、これだけ値段の上らない物も珍しかろう。銅1kg約400円では、ブルーマウンテンもおぼつかない。

鉱山の経営は、一が価格、二が品位、三四が無く、五に技術と言われるが、このような金属価格では男のロマンも夢のまた夢である。

マインングが資源工学科のプロパーである時代は、科名変更と共に過ぎ去ったのである。

資源そのものも変わって来ている。4年の折、早稲田祭の資源工学展のパンフレットに、いずれは路傍の石も資源となろう、と言う様なことを寄せたと記憶している。しかし今や、資源は路傍の石どころでは無い、4～6000mの深海底から、数1000mの上空にまで拡がり、将来はバイオメカトロニクスの範囲までにも拡がろうとしている。資源とは、無限の拡がりがある。

今資源工学会会員名簿を繙いて見ると、直接に間接に資源のあらゆる部門で活躍している会員を窺い知ることが出来る。頼もしいことである。今後も、さらに広範囲に亘っての活躍を期待してやまない。

最近の教科の内容については充分に知る所ではないが、時代に即して変わって行くべきものと思う。国立大学では、そう簡単には出来ないが学の自由・独立を標榜する早稲田大学に於いて初めてなせることである。温古知新と進取の精神、これが資源の進む道ではなからうか。

早稲田を出てから十九年、世の中の波風を受けながら、来し方を振り返ってみると、資

源工学科のあの何とも言えない家族的な雰囲気、これこそ真に心の故郷である。何かにつけ、心の故郷に集り参じようではないか。

（昭39資源、日本鉱業協会技術部・

日本鉱業㈱から出向）

## 設備部門に携って

加藤 允信

春風に誘われて江戸を旅立ったのは十返舎一九の弥次喜多ですが、私は昭和40年高度成長の竜巻に吹き上げられつつ、橋本研究室から建設業のエアコンを中心とする設備工事会社に入社し、現在に至って居ります。当時の卒業生は、近年に比らば資源プロパーの仕事以外の多くの方面へ進んで行った傾向にありました。特に建設ブームもあって建設関係が多かったと記憶しております。社会情勢が複雑になるに伴いそして科学技術の進歩につれて、一企業に要求される技術分野も多角的になるのは当然です。建設業は特に多角技術が必要とされる分野と言えますが、その中で私の携わっている「設備」は、流体・熱力・音響を始め・電気・電子・原子力等々あらゆる技術・知識が必要になります。技術のみならず物流とか医学の分野も、これは必要と言うよりも出くわすと言った方が合っていると思います。勿論鉱山も例外ではなく、最近の例としては、群馬県万座鹿沢の硫黄の廃坑に生活水の水源を求めていたある施設より、水源付近から硫化水素が多量に発生して使用不可能となり相談をもちかけられた事がありました。私の会社の主な事業内容は、一般ビルの空調・衛生・電気設備の他に防災・情報管理・地域冷暖房・廃棄物処理・水処理・水族館・消雪・太陽熱・クリーンルーム・バイオハザードその他際限無く多様ですが、私が入社以来一番長期間携わって来た地域冷暖房について少々触れてみます。ある区画を限定して、その全地域に冷暖房用の冷熱源・温熱源を供給するのが地域冷暖房ですが、ただ単に冷水

や蒸気を作って供給するだけでは面白さが無く、社会的メリットありません。ゴミ焼却施設の排熱・発電所・変電所の廃熱を利用したり、太陽熱にエネルギーを求めたりしていますし、最近では原子力発電所の廃熱利用も研究中です。現在ある廃熱を利用しようという観点に止まらず、新都市計画として発電所を建設し、冷暖房熱源も電気・ガス・水道等と同様に都市基幹設備として今後は展開されつつあります。

技術的には体系化が遅れ理論に則る部分が狭い空調技術と言えますが、それなるが故に先に述べた熱併給発電や太陽熱利用を始めとするソフトエネルギーパス関連技術の比重が増々高まるものと予想されます。これからの技術者は、広範囲の基礎理論を充分現解している事が不可欠であり、且つ、問題提起能力とプロジェクト企画能力が問われる事と思います。最後に企業が人材を求めるにあたり技術能力を問うばかりでなく人間性をも問いますし、研究セクション以外のラインの仕事ではむしろ、後者の方を重要視している事を学生諸君の為に付け加えさせていただきます。

(昭40資源、新菱冷熱工業㈱)

## 地震工学・雑感

中村正博

我国のような地震国では重要構造物の建設に際して耐震性の考慮が必要となり、利益を追求する企業においてもいわゆる地震工学とよばれる基礎的研究に力を注いでいるのが現状である。筆者は建設業の研究所で主として地中構造物の耐震性に関する研究を担当しており、この分野を通じて日頃感じている想いを述べることにする。

我国の都市住民を対象として実施された最近のアンケートによれば、「日頃こわいと思うものは」1位が「大地震」、2位「火災」、3位「ガンなどの病気」、4位「交通事故」であり、日常生活の中で「大地震」のもたらす不安・

恐怖感は都市住民にとってきわめて強いものとなっている。また、「地震災害と他の災害の相違点」については「正確に予知することができない」・「地震の発生はくいとめることができない」・「被害が瞬時のうちに起こる」が上位を占めている。地震被害の軽減には車の両輪的役割を果たす地震予知と地震工学の進歩が不可欠となるが、残念ながら震害の絶無を願って研究に励んでいるのが現状である。ユネスコも1960年代には「人類の生命と財産を地震から護る」ことを地震に対するユネスコの基本理念としたが、1970年代には「震害を軽減する」というふうに変えている。

地震工学に関する研究が主に日米両国で支えられていることは、4年に1回の度合で開催される世界地震工学会議に提出される論文数からも裏付けられる。ところがケインズ主義のやり過ぎのせいか、米国では不況のために地震工学への研究助成金が減少し、この争奪戦が研究者間で激化している。一方、世界不況の中にあっては上出来の我国ではあるが、近年の安定成長下においては建設業としても海外市場への進出が必要となる。世界地図で構造物に大被害を与える規模の大きい地震の震央域を大別すると、チリの南端から太平洋沿岸沿いにペルー・メキシコ・カリフォルニア州・カナダと北上し、アリューシャン・千島から日本・台湾・フィリピン・ニュージーランドに至る環太平洋帯域と、フィリピンから西に延びヒマラヤ・イラン・トルコ・イタリア・アルジェリア・ポルトガルに達する帯域とがある。「日頃こわいと思うもの」の1位が「大地震」である我国に対して、これら諸外国のうち一体何ヶ国が日本と同じ考えをもっているであろうか。「飢餓」の解消を先決とする国にとっては、地震工学に関する研究・技術がどの程度の意義をもつであろうか。鉄筋コンクリートならぬ竹筋コンクリートの研究に精を出す発展途上国にとっては、日米両国をはじめとする先進国の先端技術も高嶺の

花かもしれない。

当然のことながら、同じコストなら地震に強い構造物の方が弱いものより好まれるであろう。ところが構造物の寿命内に来襲するかどうかは確かでない大地震に対して、万全の対策を施すことは逆に不合理となる。限られた建設予算の枠内で最適の構造物を建設するためには、不確実性下の多目標問題を解決することが必要となる。換言すれば、構造物の建設費用はもちろんのこと、その安全性・機能性、さらに構造物周辺の環境・住民との調和ならびに発注者の好みなどの多くの目標を考慮し、その按分から最適の構造物を建設することが必要である。以上の観点から、筆者は地震工学をはじめ周辺領域の分野にも興味をもち、発注者の意思を反映した最適構造物の建設のため、鋭意研究している毎日です。

(昭46資源、48修士、フジタ工業㈱)

技術研究所)

---

## 情報産業の現実

---

平松 清嗣

私が現在の会社を選んだ理由は、大学時代にちょっと触ったことのあるコンピュータとは、いったい何ができるのか、という点に興味を覚えたからでした。そして入社以来やがて6年、システムズ・エンジニアという職種を続けてきて感じていることを述べます。

オフィス・オートメーション、パソコン・ブームと、情報エレクトロニクス産業にまつわる話題には事欠かない今日この頃ですが、一見花形とも見えるこの産業の将来は本当にバラ色なのでしょうか。決してそうではない、と私は考えています。

とにかく話をもう少し具体的にするために私が取扱っているコンピューティング・シス

テムに的を絞ってみますが、このコンピューティング・システムは大きく3つの構成要素から成り立っています。すなわち(1)ハードウェア、(2)ソフトウェア、(3)ライブウェア、の3つです。(1)、(2)については多くの方々がご存じと思いますが、(3)はちょっと耳慣れない言葉かもしれませんが、これは実は人間、つまりシステムを機能させるのに必要な「人」のことで、いくらりっぱなハードウェア、ソフトウェアが備わっていても、それを動かす人がいなければ、そのシステムは何の役にも立ちません。そして前述した、マスコミでもてはやされ、脚光を浴びているのは、その大部分が(1)であり、(2)や(3)ではありません。逆に(2)、(3)は旧態依然とした職人芸的家内工業の域を脱していないのが現状で、これは、この分野の基盤となるべき、システム工学、ソフトウェア・エンジニアリングの不整備が原因なのではないかと感じています。ちなみに広辞苑によれば「工学」とは、基礎科学を工業生産に応用して生産力を向上させるための応用的科学技術の総称、とあります。例えば、数100本のプログラムが集まって機能する銀行オンラインシステムに、ある機能追加をしようとするとき、その内の1本を(その昔)担当した人が既に現場にいないためにどう修正してよいかわからないといった事態が発生することがあります。このようなものを工学に基づいた生産物とは言い難いとは思いになりませんか。

さてここまで、ずいぶん悲観的な事ばかり書いてきましたが、実はこのような事情から現在コンピュータを使っているユーザーは、何らかの形で「開発したくても手のつけられない新規システムの構想」をもっています。これらを「バックログ」と呼びますが、このバックログを消化するために現在多くの人材が求められているのです。そして技術革新のテンポが速く、今日の最新知識が明日はもう陳腐化するこの世界では、過去の知識・経験

だけに拘泥することなく、新しい知識を取り込み応用できる、言い方を替えると、回路やプログラミング技術に精通したスペシャリストではなく、ジェネラリストが求められています。そこで、物理、化学、機械、電気と幅広く学ばれた方こそってこいの分野であると言えます。

(昭50資源, 52修士, 日本IBM(株))

## 海外プロジェクトに携わる

——建設業——

鈴木 信行

卒業と同時に(株)青木建設に入社しました。当時(現在でも変わらないが)我社は海外に進出を計るべく、ブラジル、パナマ、アメリカ、香港において受注活動を活発に行っていました。ちょうど入社直後香港において、1,000万 $m^3$ に及ぶ大量土岩工事(CHINA LIGHT & POWER 社のキャッスルピーク火力発電所造成工事)を受注し3ヶ月間の英会話研修後香港に赴任しました。

土木作業において(どんな仕事でも同様だと思います),我々作業所の職員から、下請の世話役、そして労務者全員にいたるまで、コミュニケーションが通い、全員の団結がなければ容易に工事をすすめることはできません。ところが3ヶ月間でつめ込んできた英会話は全くと言ってよいほど役に立ちませんでした。香港では第一国語は英語ですが(現在では第一国語は英語及び広東語に改められました。)作業所の労務者は英語どころか、それぞれの出身地の違いから、広東語、福建語、客家語、北京語などの方言を使い、労務者同志の会話にも通訳が入ることもありました。こういう労務者に仕事をしてもらうのに漢字を書いてみせるのが有効であることに気がきました。発音は異っても意味はほとんど同じですから。しかし驚いたことに字の読み書きのできない人が非常に多かったのです。土木作業所で働いている労務者のほとんどは大陸(中国)から逃げてきた人達です。キャッスルピーク

作業所も国境に近い海に面した所なので、小さな舟でまたは泳いで大陸から逃げてくる人達をたくさん見ました。運良く九龍の街の中まで逃げ込める人はほんのわずかで、多くは力尽きて水死するかフカに食われるか、上陸できてもすぐに警察につかまり強制送還されてしまいます。我々の作業所の岸にも力尽きて水死した逃避者達の屍が幾体も打ちあげられました。

海外工事の特異性の第一にあげられるのは規模が大きいということです。1,000万 $m^3$ の土岩を短期間で移動しなければならないということで、10 $m^3$ 近くもあるバケットをつけたショベルが5台も投入され、45トン積ダンプが10台、32トン積ダンプが25台も投入されるなど日本国内では見ることができないような編成になりました。月間出来高は最高50万 $m^3$ を達成できました。

私が香港に赴任して4年半が過ぎ、当時からの工事は全て完工し、それらから得られたノウハウをもって昨年香港地下鉄路公司(MASS TRANSIT RAILWAY CORPORATION)社より第3期工事(ISLAND LINE)の内6工区(総受注額約800億円)を受注しました。私はその中のセントラル駅舎拡張工事に配員されています。第1期工事で施工された連続地中壁内部を掘削し、現在の駅舎の下にさらにもう一層拡張します。この連続地中壁工法

(Diaphragm Wall Method)は石油探査工法の一つとして開発されたものです。それ以外にも資源開発技術が土木施工法として利用されていることをききます。そして、これからも資源開発技術が新しい土木施工法に生かされるよう努力してゆきたいと思っています。

(昭51資源, 53修士, 青木建設(株)香港支店)

## プラントエンジニアリングに携って10年

松本 修

卒業以来丁度10年になりますが、その間の



仕事の思い出や今後の展望を記させていただきます。

私の在籍している日揮㈱は、主に石油、ガス、原子力などの工業プラント建設を行っているエンジニアリング会社です。この中で私はプロジェクト部門と呼ばれ、計画から設計、建設、引渡しまで一貫して遂行、とりまとめを行うセクションに属しています。個々のプロジェクトはチーム単位で実行されますが、私の場合、48—53年：北海道で発電所向の燃料油パイプライン建設、54—55年：クウェートで原油出荷用のポンプ設備建設、そして56年—現在：北海道で原油備蓄基地建設に携わって来ました。その間単発的に他の仕事にもタッチしましたが大きくはこの三つです。

最近では金額規模にして、一件数千億円にも達する大型プロジェクトもあり、それらに比べると私の携ったものは小さなプロジェクトでしたが、逆に、それだけに小さなチームで幅広く色々な事柄に接することができたことは良かったと考えています。

北海道のパイプライン建設は、初めての仕事でもあり、今から考えると無我夢中でした。後半の2年半は建設現場に駐在していましたが、色々な制約・障害の多かった仕事です。しかしどの様な仕事でも同じだと思いますが、苦労を共にした人間関係、特にこれは同じ社内にとどまらず客先や他の同僚達と、そして建設が完了し無事その機能が発揮され始めた時の喜び、これらが代え難い貴重なものであることを教えてくれました。又、建設現場というところは、極めて泥くさいことも多いのですが、体力・精神力・技術力、四・五番が無くて六番に語学力（海外の場合）という様な話も実感として分ることができました。

クウェートでの仕事は、私にとって初めての海外経験でした。建設の対象は、16,000馬力のガスタービン駆動原油出荷ポンプ設備で、クウェートの原油出荷基地である。ミナ・アハマディに設置されています。設備は大半が

海外調達品で、ガスタービン（アメリカ）、ポンプ（ベルギー）、ギャボックス（ドイツ）、電源設備（イギリス）、バルブ（イタリア）、そして制御設備（日本）と多岐に渡っています。又現場での施工はクウェートの建設業者があたり、現場担当チームにはイギリス人も加わり、小規模なチームでしたが、貴重な又楽しい体験でした。前半は客先や海外メーカでの出張打合を含む設計業務、後半は現場での試運転、引渡し業務が主な担当で、技術的なトラブルは結構ありましたが、緊張感に満ちた（しかし半面日本と違い余りあくせくしない）そして最後は大変気持ち良く終えることのできた仕事です。

この10年で世相や価値感も含めた環境の変化もあり、今後私自身が携わる仕事にも必ずその変化は影響しますし、新たな環境変化も必ずあると思います。しかし長い目で見た、恒常性に基づいて、余り過去にとらわれない柔軟な考え方をえ持っていれば必ず対処できると思います。経験を積むごとにある程度保守的になっていくことは避けられませんが、入社した頃、経験主義に対して大変反発心を持ったことを良く憶えています。何かを創造したり、新しい事柄に対処する時、経験だけでは無く必ずその経験の基となった状況や条件も含めて考え直すことが最っとも大切だと思います。今後共何事にも好奇心を持ちチャレンジできる様努めたいと考えます。

（昭48資源 日揮㈱）

---

## 資源工学科の動き

---

昭和57年度

### 1 資源工学科日誌

4月1日（木） 入学式（記念会堂）

2日（金） 始業式 1年生ガイダンス  
資源工学科入学者 66名（うち女子1、一般高校からの推薦入学者2） 新入生担任

は岩崎考助教授。

大学院入学式 前期課程14名(うち女子1, 資源工学科卒13, 教育学部地学科卒1), 後期課程1名(韓国人)が進学。

24日(土) 資友会主催の新入生歓迎会を岩石鉱物実験室で開催。軽度の急性アルコール中毒者が数名でた。

5月7, 8日(金, 土) 第19回理工スポーツ大会を河口湖畔で開催。

22, 23日(土, 日) 新入生オリエンテーション。秩父セメント三輪鉱山, 三菱セメント横瀬工場を見学後, 秩父セメント山羊山荘で懇親会。荒川園, 秩父山荘に分宿, 翌朝現地解散。参加者 教員2名(岩崎助教授, 野口助手), 新入生37名, 補助員(大学院生)7名。

27日(木) 昭和58年度大学院前期課程入学志願者の面接が行われ, 資源工学科5名, 教育学部地学科1名(女子)の入学が内定。

6月1日(火) 職員の配置替えが行われ, 連絡事務所の浪岡ひとみさんは教務課へ転出, 後任に樋口恵子さん(昭57, 上智大)。

15, 16日(火, 水) 専任教職員による総長候補者選挙が行われる。

24日(木) 浪岡, 樋口両嬢の歡送迎会を高田馬場「文流」で行う。

7月8日(木) 役職者の選挙が行われ, 加藤忠蔵学部長, 加藤一郎工研委員長, 今井直哉理工研所長がそれぞれ再選された。

22日(木) 総長決定選挙が行われ, 西原春夫法学部教授が次期総長に内定。

23日(金) —— 9月16日(木) 夏季休業

9月12日(日) 昭和58年度大学院前期課程入学試験。資源工学科から1名合格。

16日(木) 学科主任交替。山崎純夫教授から山崎豊彦教授へ。任期2年。

10月21日(木) 創立100周年記念祭

31日(日) 昭和58年度一般高校からの推薦入学者面接。当科に対する推薦依頼校

9校のうち7校から応募があり, 7名全員入学内定。

11月2日(火) ~ 8日(月) 早稲田祭

5日(金) ~ 7日(日) 理工展

12月13日(月) 3年生現場実習発表会

13日(月) ~ 1月6日(木) 冬期休業

1月11日(火) 教室新年会(参会者28名)

18日(火) 森田豊夫教授最終講義  
題名「鉱山・安全・環境について」

2月12, 14日(土, 月) 卒業論文審査会

15日(火) 大学院前期課程修業論文(修士論文)審査会

18日(金) 教授会で綱田幸司君の4月からの助手嘱任を承認される。

27日(日) 理工学部入試。受験者15,680名(昨年より1,325名増)

3月8日(水) 合格者発表。資源工学科の発表数は210名。

23日(水) 教授会で森田豊夫教授の定年退職を承認。夕方から京王プラザホテルで教室関係者による送別パーティーを開催。

25日(金) 卒業式, 学位授与式。

学部63名(うち女子2名), 大学院前期(工学修士)13名, 後期(工学博士)

4名。夕方から東京海洋会館で卒業生主催による謝恩会。

## 2 就職内定状況

### 学部

#### (1) 鉱業

日鉄鉱業, 三井鉱山, 同和鉱業, 日本鉱業, 日本重化学工業

#### (2) 石油開発

日中石油開発(2), 石油資源開発(2), 関東天然ガス, 帝石

#### (3) 石油化学

出光興産, 鹿島石油, エッソ

#### (4) 化学, セラミックス

京都セラミックス, TDK(2), 信越化学, 吉野石膏, 日本板ガラス



(5) 機械

新潟鉄工, 小松製作所, 石油さく井機,  
東洋エンジニアリング

(6) 建設

I N A 新土木研究所, 青木建設(2),  
東急建設

(7) 商社

守谷商会, 第一実業, 三井物産, ニチメン,  
極東貿易

(8) 情報関係

日本IBM(2), コンピューターサービス,  
シャープシステムサービス, エリック,  
富士通第一通信ソフトウェア, バロース  
丸紅情報システムズ

(9) 公務員

工技院九工試

(10) その他

マルマン, 日本ビクターサービス, テキサ  
スインストルメンツ, 三菱銀行, 日興証券  
(2), 東京エレクトロン, 横河電機, 栗田  
工業, 日本電気, 日本ビクター

(11) 大学院進学

早大資源(5), 早大物理(2), 東大,  
東工大

大学院(前期課程)

合同資源産業, シェル石油, 出光石油開発,  
石油資源開発, 富士通, シュランベルジャ,  
荏原インフェルコ, 昭和電工, 石油公団,  
出光興産, 特許庁

大学院(後期課程)

東芝セラミックス, 日本電気, 早大助手

3 学位取得者(昭和57年度)

課程によらない者

工学博士(6月10日)

中村正博(昭46資源, 48修士, フジタ工業(株))

論文題目 「地中構造物および周辺地盤  
の地震時ひずみに関する基礎的研究」

(主査 橋本文作)

課程によるもの

工学博士(3月8日)

岩淵研吾(昭52資源)

論文題目 「ドロマイトおよび関連鉱物  
の熱分解反応」(主査 大塚良平)

江間俊一(昭52資源)

論文題目 「東南アジア産未利用鉄資源  
の原料工学的研究」(主査 原田種臣)

綱田幸司(昭和53資源)

論文題目 「日本の中・新生界に産する  
炭質物の石炭岩石および古植物学的研究」  
(主査 山崎純夫)

原田道昭(昭51教育地学)

論文題目 「セメント-骨材反応~その鉱  
物化学的反応とコンクリート強度~」

(主査 萩原義一)

4 専任教員海外出張

今井直哉 8月/1日-20日 韓国(学生  
引率地質調査他)

岩崎 孝 8/4-15 台湾(砂石資源開発  
検討会), 8/29-9/10 米, 加(米国  
鉱山学会出席他), 11/24-29 台湾  
(鉱冶工程学会出席)

大塚良平 9/4-11 米(米国鉱山学会  
参加)

原田種臣 8/17-30 インドネシア(技  
術指導)

房村信雄 5/26-6/13 ユーゴスラビ  
ア(世界鉱業大会組織会議), 8/9-29  
ペルー(技術協力)

山崎純夫 7/23-8/1 韓国(研究所  
訪問他)

山崎豊彦 3/26-4/5 中国(技術指  
導)

## 資源工学会から

### 1 会合

総会 昭和58年度総会を4月28日大隈会館において開催。会員85名、学生会員11名、計96名が出席。

幹事会 4月16日(金) 資源工学科会議室において開催。主な議題は総会準備。11月25日(木) 資源工学科会議室において開催。

会長(学科主任)が山崎豊彦教授に交替したための顔合わせと、会の運営方針について検討した。

### 2 会員消息欄新設

本号から会員の消息欄を新設することになりましたので、御利用下さい。そこで一例を57年3月発刊の会員名簿54ページの昭和22年・第35回・採鉱冶金学科の修正(発刊後に判明分追加を含む)を以って示すことに致します。

| 氏 名     | 自 宅 住 所                                     | 勤 務 先                 | 同 左 住 所                                  |
|---------|---|-----------------------|--|
| 出 田 秀 明 | (03-777-4107)                               | 共立ファインケミカル<br>研究所(自営) |  |
| 川 越 一 夫 | 182 調布市菊野台2-48-1<br>キサラギ荘203号(0424-81-2242) | (株)内外データサービス          | 103 中央区日本橋本町1-1<br>共同ビル7F(03-241-5281~4) |
| 坂 上 欣 男 |   |                       | (03-277-4581)                            |
| 高 田 晃   | 191 八王子市長沼町987-142<br>(0426-36-1699)        |                       |  |
| 服 部 勝 一 | (03-605-1855)                               |                       |  |
| 美 甘 震 八 | 438 静岡県磐田市見附3966<br>-1                      |                       |  |
| 西 田 稲 男 | 194 町田市小川町4061-3                            |                       |  |
| 嶺 宏     | 177 練馬区下石神井2-31-6<br>(03-841-7928)          |                       |  |

(副会長…宮 輝雄<昭22卒>)

**お知らせ** 昭和58年度資源工学会総会を森田豊夫先生のお稀のお祝いを兼ねて4月28日(木)に開催します。

**編集後記** 春酣々な候に会報18号をお届けします。本号は森田先生の定年退職に伴う記事をご本人に、数少ない鉱山プロパーの林氏にその方面の寄稿を、そしてマイニング関係

以外の分野でそれぞれの特技を発揮されている私の所を出た5名の錚々たる方々に寄稿をお願いしました。例年より1ヶ月余りも早く4月1日に発行せよとの指令で、面白い雑記事にまで手が回らず会員諸氏のご要望が満たされていないかも知れませんが、ご容赦下さい。(橋本文作記)

〒160 東京都新宿区大久保3-4-1

早稲田資源工学会 早稲田大学理工学部資源工学科内 電話03-209-3211内線2137

振替番号 東京1-143534

(非売品)

協和銀行早稲田支店 普通141-322760